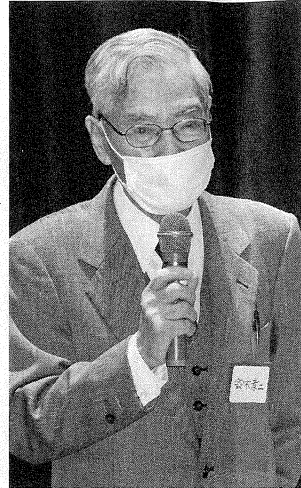


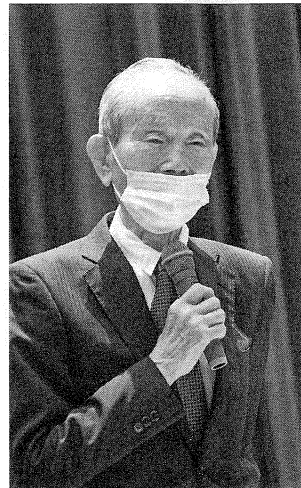
2氏が基調講演

鈴木孝二氏 加藤勝弥

には民権政治家、北越学館(新潟市)の創設・館長などの教育、新聞創刊などの事業者としての側面がある。政治家としては、母俊子の影響もあると思うが、県議、国会議員、その後の政治家として「無私」の精神で天職を歩んだ人」だったと思う。動かしたものは自由民権運動。高田事件に連座したことで、生き方などの内面を見つめることになり、ふるさと、県内の運動に関わり最年少、25歳で初期の県議会議員となり、国会議員を挟んで8期当選を果たした。一番生き生きとしていたのが、地方議会の中で生きよつとした真誠時代であ



鈴木孝二氏



孫の加藤祐三氏

り、ふるさと、下越の人たちのために頑張ろうとされていたと思う。何をした人か。今の国

加藤勝弥も東京市ヶ谷

「無私」の精神 田中正造と共通面

道7号の整備、実は廃娼運動にも関わり、県議会最初提案した1人であり、その法律づくりにも関わっている。庶民、困難な生活の中で生きる人たちの立場で政治を行っている姿は、日本の近代史の中では足尾銅毒事

に米国留学をやめて新潟に移り、リベラルアーツの中等教育学校「北越学館」を、外国の言教団体に

の広大な土地を売って村上の飯野に移り、政治活動を続けた。そうした偉業を受け継ぐということ、は、どうものを見て、どう考えていくかのきっかけになるのではないか。教育面では次世代を背負っていく青少年のため

ろいろな方面で活躍し、津田塾で学んだ四女タカもまた国際人として活躍し、また普通選挙でない時代に旧八幡村の村議になり、戦後はGHQとともに新潟市、新潟県内の社会教育活動に挺身している。

勝弥はまた新潟日報の前身、新潟毎日新聞の会計監査を引き受けたほか、村上教会の長老として財政面で支えている。没後100年にあたり、私たちはその「無私」の精神を何らかの形で認識し合い、激動の時代を生きていくべきではないかと思う。

加藤祐三氏 タカ叔母については、津田塾時代の苦労を聞いている。記録はないが、記憶の中で生きていく。個人的な経験としては、中学3年の夏休み(1948年)初めて板屋沢に行き、加藤二蔵さん宅に泊めてもらった。二蔵さんが水眼鏡を使って巧みに魚を獲る様子やウナギ採りの仕掛け等の体験を夏休みのレポートとして提出したら、担任に褒められて文章を書く喜びを知った。勝弥が血気盛んな30代は、国会開設に向け、新しい動きが渦巻いていた。明治10年から20年にかけては、「新聞」や「哲学」など文字の新造漢字が生まれた時代。勝弥も混乱しつつも懸命に生きていたと思う。私も今後、最後の孫として頑張っていきたいと思っ

次週30日は休刊です